

『日本アジア研究』第6号(2009年3月)

## ポリフォニー現象の言語分析と社会科学 ——デュクロのポリフォニー言語学をめぐって——

三浦 敦\*

バフチンの研究以来、文学研究や言語学研究、さらには最近のポストモダン人類学においても、言語におけるポリフォニーは重要なテーマとなっている。この点においては、フランスの言語学者デュクロが、フランス語の語用論的分析を元に、1984年に重要な理論を提出している。本稿は、彼のポリフォニー言語学の理論を検討することを通じて、社会科学におけるポリフォニーの意味を考察するものである。本稿ではまず、言語学理論におけるデュクロ理論の意義についてまず検討した後、民族誌的データと調査方法論をデュクロ理論の観点から再考した。そしてその上で、オーストロネシア語族の言語（ここではフィリピン諸語とマレー諸語）を例に、非ヨーロッパ言語における言語活動におけるこの分析方法の可能性を検討した。

**キーワード:** ポリフォニー、デュクロ、主観性、オーストロネシア語族

### 1 はじめに

1980年以降、文化人類学において大きな影響力を持ったポストモダン人類学は、それまでのさまざまな文化人類学の近代主義的前提に疑問を投げかけたが、そうした批判の一つは、民族誌というものが暗黙のうちに「文化人類学者」という作者の絶対の客観性を前提にしていることへの批判であった。そこでポストモダン人類学では、バフチンの議論を参照しつつ、民族誌を含めたテキスト一般はポリフォニー的であることと、民族誌的調査が実際にはインフォーマントとの対話によってなされるものであることが指摘され、調査とテキストのポリフォニー性をより積極的に評価するような民族誌記述がなされるべきであると主張され (cf. Clifford 1988)、また対話的民族誌もさまざまに試みられるようになった (ex. Crapanzano 1980)。こうして、文化人類学においてもポリフォニーはさまざまな場面で議論されることになった。

しかしながら、こうした民族誌のポリフォニー性への着目にもかかわらず、現実社会のポリフォニー性自体の分析はなされることはなかった。なぜなら、松木啓子も指摘するように、文化人類学者は「他声」性の重要性を指摘しつつも発語の意味内容のみに関心を抱き、発語の言語形式(具体的な記号現象)には注意を払わなかったため(松木 1999: 769)、ポリフォニー性の分析に必要な諸概念を持たなかったからである。そのため、ポストモダン人類学においてポリフォニー自体は分析のテーマとはならず、「他者の言葉の抑圧」を批判するための単なる政治的スローガンに終わってしまった。しかしポストモダン人類

\* みうら・あつし、埼玉大学教養学部准教授、文化人類学

学から離れより広くさまざまな人類学的言語研究,さらには言語研究全般に目を向ければ,ポリフォニー概念は,既存の研究の単なるイデオロギー批判だけではなく,実証分析にもすでに適用されてきていることがすぐに分かる。

本稿の目的は,そうした研究の例として,フランスの言語学者であるデュクロが1984年に発表したポリフォニー理論に焦点を当て,言語におけるポリフォニー現象の諸分析手法の発展の跡をたどりながら,ポリフォニー現象の社会的含意について展望を示すことである。ここでデュクロ理論を取り上げるのは,それが,発語の言語形式上でポリフォニー性を分析する方法を精緻に練り上げた理論の一つだからである。以下では,ポリフォニー現象をめぐる議論を紹介することで,特にポリフォニー現象の社会科学的含意を明らかにしていきたい。

## 2 ポリフォニー的言語分析

### 2.1 起源: バフチンのポリフォニー論

ポストモダン人類学にしる,デュクロにしる,ポリフォニーを議論するにあたってその概念の由来として言及されているのが,バフチンの文学研究である。

バフチンはそのドストエフスキー研究において,一つの小説の中に主人公とは別の,しかし主人公と対等の資格で立ち現れるもう一つの別の主体があり,主人公とその別の主体との間で対話がなされているということを指摘した。彼によれば,ドストエフスキーの小説では,登場人物は,作者によって一方的に制御されるような「モノローグ的」存在ではなく,作者と主人公,および作中の登場人物相互が,お互いに対等な関係におかれ,それらの間で各登場人物は他者の言葉の影響を受け,登場人物は作者による一方的な客体化に抗している。これに対しモノローグ的小説では,さまざまな登場人物は最終的には作者の統一的な論理の中に統合されてしまうような,作者に一方的に従属した存在として提示される。そしてバフチンは,「近代においてモノローグ原理が強化され,それが思想活動のあらゆる領域に浸透して来たことに力を貸したのは,単一で唯一の理性を崇拝するヨーロッパの合理主義,とりわけ啓蒙主義時代の思潮である」(バフチン 1995: 167)と指摘する。

バフチンによれば,ポリフォニー的特性はドストエフスキーの小説に限らず,あらゆる発語の特徴である。

いかなる発話も,あるコミュニケーションの領域に連なる鎖をつなぐひとつの輪に過ぎない。発話の境界線は言語の主体の交代によって引かれる。したがって,一つの発話は他の発話に無関心ではいられないし,それ自体で完全な単位となることも無い。発話はお互いに関連し合いながら,お互いに反映し合い影響し合う。そしてこのような相互反映が発話の性格を決めるのである。一つ一つの発話は他の発話のこだまとその反響でいっぱいになっていて,それらの関係はコミュニケーション領域の共通性によって保たれている。そのため,全ての発話は先行する発話に対する「反応・答え」として理解されなければならないし,[中略]また実際,他の発話を否定し,肯定し,補足するものであり,他の発話を前提にしてそれに依存し,何らかの形で考慮に入れたりもしているのである。(Bakhtin 1986: 9)

つまりバフチンによれば、一つの発語には一人の主体の一つの声のみが反映されているのではなく、複数の主体のさまざまな声が反映され、それぞれの声がお互いに影響を与え合う中で、一つの発語の意味作用が形成されるのである。このとき現れるさまざまな主体とは、現実世界のさまざまな人間の場合もあるが、発話する本人自身が、多様な主体のあつまりとして立ち現れてくる場合もある。そして個々の主体が主体となるのも、こうした対話性を通してである。

すでに見たように、バフチンの議論は、単一で絶対の論理や主体性といった近代思想の前提を否定するものである。そしてそれゆえに、その後のさまざまな言語研究（文学研究から語用論的研究まで）に大きな影響を与えることになった。したがって、ポリフォニー性を認めることは、単一の主体性を前提とした社会科学理論や近代社会制度の妥当性を再考させるものでもある。

## 2.2 デュクロ以前のフランス言語学

バフチンの文学研究の成果を精緻な言語学方法論に練り上げたのが、デュクロである。デュクロのポリフォニーの言語理論は、言語学上の問題を考察するために定式化したものであり、それまでの言語学研究の成果を踏まえたものであった。そこで、デュクロのポリフォニー論の概観をする前に、まずその学説史的背景についてみておくことにしたい。重要となるのは、フランス言語学の議論と、構造主義・ポスト構造主義の議論である。

フランスには独自の言語学の伝統があるが、そうした伝統を体現する研究者の一人がバンヴェニストである。ソシュールのラングの言語学に対して、実際の発話を重視するディスクール言語学を唱えたバンヴェニストは、きわめて多岐にわたる言語学研究を行ったが、その業績の重要なものの一つに、「私」(je) 概念をめぐる主観性 (subjectivité) の研究と時制をめぐる研究がある (Benveniste 1966)。「私」概念の研究では、「私」がヤコブソンのいうシフター (ダイクシス) であり、「あなた」(tu / vous) というシフターと対になっているのに対し、三人称はシフターとしての特徴を持たないがために「無人称」と呼ぶのがふさわしいと指摘している。また時制についての研究では、フランス語のアオリスト時制である単純過去・前過去に着目して、過去に言及する言語形式には通常時制による「話し」(discours) とアオリスト時制による「語り」(histoire) を区別する必要があると指摘する。のちにジモンニ=グルンバッハはこの考察を発展させ、「話し」にはシフターが現れるが「語り」にはシフターが現れないことを指摘している (Simonin-Grunbach 1975)。このため同じ事実を述べていても、「話し」は主観的な表現形式となるが、「語り」は客観的な装いをとることになる。こうした考察の延長で語法を考慮に入れると、一連の発語の中には、主観性の現れの異なる複数の言語形式が含まれることがあることが示される。すなわち、直接語法においては引用という形で第三者の主観性が提示され、さらにフランス語に見られる自由間接語法では、明白な引用という形をとらずに、しかも話者の主観性に従属させられることなく、第三者の主観性が話者の主観性と対等に一つの文の中で提示されるのである。

他方、言語学的研究とは別に、ラカンやレヴィ=ストロース、さらにはフォーコーが「主体」の単一性や社会に対する主体の優位を否定し、「主体」概念批判に道を拓いた。その後クリステヴァは、バフチンから刺激を受けて、「間テ

クスト性」の概念によって発語がさまざまな引用から成り立っていること（したがって、発話者だけではなく引用元の主体性も発話に現れること）を示し、デリダは語る主体の単一性と首尾一貫性を前提とする議論をロゴス中心主義と呼んで批判した。また文学研究の分野では、ジュネットがブルースト研究の中で、『失われた時を求めて』においては複数の主体が現れていることを指摘した（この研究はデュクロの議論に直接ヒントを与えた）。フランスでバフチンの諸著作が翻訳・紹介されるのも、こうした関心の高まりの中であった。またデリダは、オースティンやサールらの言語行為論もロゴス中心主義の上に成り立っていると指摘して批判したが、その際、まさに言語行為の主体（あるいは著作権の主体）として指示される「私」とは誰なのかを問うた（ここでデリダは、「言葉を話す」という行為だけではなく「文字を書く」という行為も視野に入れていたが、「書き言葉」が「話し言葉」と言語的にも社会的にも異なる特徴を持つものである点については、あとで論じる）。

### 2.3 デュクロによるポリフォニー論の提案

デュクロがポリフォニー論を構想した直接の理由は、言語行為論上の問題を解決するためであった。イギリスの言語行為論は、1963年のロワイヨモン会議においてフランスに紹介されたが、その後、バンヴェニストやフォーコーによる言語行為論の取り込みを通じて、フランス言語学でも重要な論点の一つとなっていく。デュクロの議論はその延長上にある。

デュクロのポリフォニー論は『言うことと言われたこと』(*Le dire et le dit*)という論文集の最終章にあたる「ポリフォニー的発話理論の素描」(*Esquisse d'une théorie polyphonique de l'énonciation*)で体系的に提示されるが、この論文集は首尾一貫した論理でまとめられているのではなく、むしろ最初の論考（発表されたのは1968年）と最後の論考（本書のための書き下ろし）では、大きく主張が異なっている。こうした構成になっているのは、デュクロが彼のポリフォニー理論がどのような理論的必要から生まれてきたのかを明示したかったからである。

本書の冒頭でデュクロは、「私の全ての研究は、ストローソン、オースティン、サールの著作の読解を基礎にしており、私はその考えを言語学にただ応用しようと考えていたが、結局彼らの主張のほとんどを棄却することになった」(Ducrot 1984: 7-8)と述べている。彼によれば、言語行為論の枠組みでは、発話の意味が発話行為を暗示するのは、発話が発話内行為という一つのタイプの言語行為の達成となる限りにおいてであるが、こうした主張には（自らを記述するための最良のメタ言語としての）言語への盲目的な信頼がある。これに対し試行錯誤の結果デュクロが行き着いた考えは、発話の意味には、発話内行為の達成を示すというよりもより本質的な、発話行為についてのコメントが含まれているというものである。すなわち、演劇的表象、つまりポリフォニーとしての「言うこと」の記述というものがより深い現実としてあり、発話内行為の達成はそこから派生した二次的現象にすぎないのである (Ducrot 1984: 8)。しかしまた、デュクロは彼のポリフォニー論と言語行為論とがともに、意味を「他者性」に基礎づけているという共通性を持っていることにも注意を促す。言語行為論では、意味は、発話行為とその「法的」延長の間で発話が確立するという外的他者によって基礎づけられるが、ポリフォニー論では、その発話内容は、

発話行為を複数の声という内的他者の対話として記述するのである (Ducrot 1984: 9)。

それでは、なぜデュクロは従来の言語行為論は成り立たないと考え、ポリフォニー論を構想することになったのだろうか。本書の議論を簡単に追って見よう。

同書の第 I 章と第 II 章で、デュクロは、「前提」(présupposé) と「ほのめかし」(sous-entendu) の相違を取り上げながら、前提には意味論的解釈と語用論的解釈の 2 つがあり、前者は発語 (énoncé) の言語学的解釈であるフレーズ (phrase) を対象とするのに対し、後者は発語そのものを対象とすること、そして後者では、前提は言語行為として理解できることを明らかにする。

第 III 章では、発語は、その発語がなされたそれぞれの状況を考慮しなければ、その意味を理解できないと指摘する (発語内行為における発語はそうした事例の一つ)。

発語の意味とは何かを検討する第 IV 章では、発語内行為においてはその行為自体が発語によって自己参照 (sui-référence) されること、しかしサールの構成的規則についての議論とは異なり、発語内行為における発語において暗示されるのは、その発語によって提示される理想化された状況における行為であって、現実の歴史的世界の中の行為ではかならずしもない (すなわち、発語内の力が発語に内在しているわけではない) ことが指摘される。その上で、疑問という発語内行為 (たとえば駅の売店で「新聞はある?」と聞く場合) のように、質問の発語が、質問という言語行為ではなく、命令という派生的発語内行為として行われることがあることから、発語の内容だけでは発語の意味を説明できないような事例を取り上げ、グライスの会話の規則 (デュクロは「ディスクールの規則」と呼ぶ) の重要性を指摘する<sup>1</sup>。ここからデュクロは、派生的言語行為を考慮に入れると、パロールの意味は言語内だけでは理解しえず会話の規則が関与することを明らかにする。

第 V 章では、この会話の規則が意味論の中心的問題として取り上げられる。ここではまず、言語学的に抽象化されたものである「フレーズ」とその現実世界での現れ (したがって言語行為となるもの) である「発語」(énoncé)、およびその発語を生み出す行為であると発語行為 (énonciation) を区別する。そして、ディスクールの規則は、フレーズの意味 (signification) から発語の意味 (sens) (ここで、発語の意味は言語内行為の全体となる) を説明するのを可能にすると指摘した後、ディスクールの規則はまた、「字義通りの意味」と派生的意味の関係も明らかにできることを示す。

第 VI 章で、デュクロは、はっきりと言語行為論を (したがってそれまでの自分の議論を) 批判する姿勢を打ち出す。本章では言語行為論における「顕示的行為遂行的発言 (発語が直接、それがどのような行為の遂行なのかを明示している発言)」というものは厳密に定義もできず経験的事実にも対応しないということが主張され、同時に、言語学において研究対象である言語とその言語を記述するメタ言語が混同されていることが指摘され (ここでデュクロは、あ

<sup>1</sup> スペルベル&ウィルソン (1993) は、グライスの会話の規則を出発点とする関連性理論を構築し、「関連性」(relevanve) という観点からこうした派生的発語行為の問題の解決を提案している。

る文化における価値が言語分析にバイアスを与えると、文化の問題も指摘している)、行為遂行性の問題もこの混同に由来すると述べる。すなわち、行為遂行性を示す語である「約束する」などの語を、同時に行為遂行性の分析自体にもメタ言語として用いることで、「彼は約束すると言った」と「彼は『約束する』と言った」の区別がつかなくなってしまうというのである(後者は言語内行為の報告だが、前者は単なる発言自体の報告である)。言語学者は「約束するよ」という発言の意味を、「『約束する』という発言を提示することで約束という行為を行う」と解釈するが、この発言は約束するという行為そのものであって、「約束する」という語自体に「約束する」という行為遂行性が内在していると考えなければならない言語学的理由は存在しない。かくして「行為遂行性」という概念の理論的基盤が疑問に付される。

そして第 VII 章では、論証が言語によって規定される場合があることを示すために、「権威による論証」の議論がなされる。ここでポリフォニーの概念が明示され、「ポリフォニック権威」(autorité polyphonique)と「権威による推論」(raisonnement par autorité)の2つの「権威」が区別される。「これから晴れそうだ。だから外に出なくちゃね」(Il paraît qu'il va faire beau: nous devrions sortir!)という発言では、「外に出よう」という発語者(locuteur)の発言は「これから晴れる」という発言の提示(monttrer)により正当化されるものだが、「これから晴れる」という発言の主体である発話者(énonciateur=発語によって示されるその発語の著者)は、この発語者自身に由来するものである必要はない。このような議論の構造を持つものが「ポリフォニック権威」である。これに対し「権威による推論」では、「ある人がPと言っている。だからPである」という形態を取る。この場合、最初の「ある人がPと言っている」という命題自体が真偽の対象となるものでなければ、この発言に見られる推論は成り立たないとデュークロは主張する。

#### 2.4 デュークロのポリフォニック言語理論

『言うことと言われたこと』の最終章で、デュークロは体系的にそのポリフォニー論を提示する。そこで彼は発語に現れる主体について、発語の物理的生産者である「話す主体」(sujet parlant)の他に、「発語者」(locuteur)と「発話者」(énonciateur)を区別する。

発話者とは、発語表現の意味の内部において、その発話表現の責任が帰せられる者として示される主体である。一人称代名詞や他の一人称の指標が参照するのはこの主体である。発語者(発言上の存在)と話す主体(経験上の存在)は異なり得る。たとえば、ある書類で「以下に署名する私\_\_\_\_は、・・・を認めます。(署名)」という形式が予め決められている場合、署名をする「私」はこのテキストの経験的な作者ではない。しかし一度署名してしまえば、私はこの発語表現の発話者となる。他方、バンヴェニストの「語り」(histoire)のように、主体性への指示を含まない発語もある。

さらにデュークロは発話者について、「発語をする発話者」(略号L)と「世界の存在としての発話者」(略号λ)を区別する。Lは発語の責任を負い、それだけで特徴づけられる存在(発語行為の主体)である。λは中でも発話表現を行うものとして発語の内部で提示される(発語によってその発語行為の主体として提示される)存在である。

「顕示的行為遂行性」は、L と  $\lambda$  の区別により次のように説明できる。たとえば「私は願う」(*Je souhaite*) の動詞「願う」(*souhaiter*) は、まず心理学的状態についての主張に使われており、代名詞「私」(*je*) が指示する主体は  $\lambda$  として、つまりその欲求を示している当の本人ではなく、自分が行っている発言からは独立した、世界の存在として現れている。他方、願うという行為はその願いが実現される言葉の中にしか存在しないので、典型的に L に属するものであり、L は  $\lambda$  が望んでいると発言することで願いの行為を行う。

発話者は視点、立場、態度として表現されるもので、物質的な意味において言葉を発する者ではない。ここでデュクロは演劇と小説を例に発話者と発話者の区別を説明する。小説の例で言えば、彼はジュネットの物語理論 (Genette 1972) を参照し、発話者は物語の語り手に、発話者は物語の作者に、それぞれ対応し、さらに発話者は物語における「視点の中心」に対応する (作者はまた、発話者の物理的な生産者である話す主体にも対応する)。ジュネットによれば、語り手は「話す」人だが視点の中心は「見ている」人であり、同様に発話者は「話し」、発話者は「見る」のである。

以上のようなポリフォニー的言語理論は、さまざまな言語現象を説明することができる。ここではデュクロが特に取り上げて詳細に論じている、アイロニー的発言、否定、派生的 (間接的) 発話内行為、および前提について、簡単に見てみよう。

第 1 の例であるアイロニー的発言は、発話者以外の誰かに明らかに馬鹿げたことを言わせるものである。このアイロニー的発言のポリフォニー的特徴は、発話者 L がある発話者 E の視点を提示するものの、発話者 L はその発話者の責任は担わず、むしろそれを馬鹿げていると見なすというもので、ここでは L は E とは同一視されない。このとき発話者と発話者の区別は、アイロニーの矛盾した側面を明らかにする。アイロニー的発話では馬鹿げた立場は直接的に表現される (報告されるのではなく) が、しかしその発言は L には帰されないものである。自分で自分を馬鹿にする自己アイロニーの場合は、発話者は話し手以外の誰かに同化する。私はあなたに今日は雨になると言ったけど、今日はいい天気なので、私は自分の気象の知識を馬鹿にしようとする。青い空を指差して私は「ほら、雨が降っている」とあなたに言う。ここではできもしないのに天気を予報しようとした発話者  $\lambda$  は話し手自身であり、L は発話の責任者として発話内容を選択する限り、天気を予測するという行為は選択していない。ここで馬鹿にするという行為は、発話者が発話者によって達成される天気の予測を提示しつつ、同時に発話者からは距離をとっているのである。こうして L は  $\lambda$  の馬鹿な行いから利益を得るが、L は  $\lambda$  の多くの表情の一つでもあるので、 $\lambda$  は次いで逆にその利益を享受する。

第 2 の例である否定では、たとえば「ピエールは親切じゃない」という発話表現の責任を担う発話者 L は、ピエールが親切であることを支持する発話者 E1 を提示し、次いで通常 L と同一とされ E1 とは対立する E2 を提示する。「それほどは」(*pour autant*) というようなある種の表現が否定的コンテキストのみ使われるという事実も、このポリフォニーで説明可能である。この場合、こうした表現は特殊な結論を導く接続詞の一つとして扱うことができる。すなわちこの接続詞は、発話者 E1 を提示する発話者が、自分を E1 から距離を置くような形で提示するものであり、このとき発話者は E2 と同一化して E1 が達成

する結論を拒否するのである。ポリフォニー理論に従えば、否定とアイロニーは類似している。両者の主要な相違は、アイロニーでは馬鹿げた発話者の排除が直接発話者によって行われるのに対し、否定では発話者によって提示され発話者が自分自身を同化させるような発話者を通じて排除がなされるという点にある。

第3の例である派生的(間接的)発語内行為(達成しようとしている行為が、発語そのものによっては明示されないような発語行為)の場合、たとえば駅の売店で、「新聞はありますか」というような疑問の発話表現によって、新聞を要求するような発語行為がなぜ可能となるのかが、発話者と発話者の区別により説明可能となる。この例の場合、発話表現は疑問を述べる発話者を提示しているが、この発話者が発話者に同化するとき、この発語は単なる質問という顕示的発語内行為(「約束しよう」というように、達成しようとしている行為が、発語そのものによって明示されるような発語行為)である。反対に、発話者が発話者に同化しなければ派生的発語内行為となる。こうした派生的発語内行為がなぜ可能なのかについて、グライスの会話の規則に基づく通常の解決策では、顕示的発語内行為(上記の例では「質問」という行為)も、発話者によって同時に遂行されることが前提となってしまうが、これは事実と反している。ポリフォニー理論に従えば、発話者は、発話者を自分とは異なる者として提示するが、会話の規則は、この発話者の提示からこの発話者に帰せられる発語内行為を派生させるということになる。

スキーに行こうという誘いに対して「確かに天気はいいけど、私は足が痛い」と答える場合のような、さらに複雑な発話表現の場合、発語内容の全体的責任を負う発話者ととも、2人の発話者が提示されている。第1は天気がいいと言ってスキーに肯定的に議論している発話者で、たとえば聞き手のような別の人に同化する。しかし発話者自身は2番目の、この外出計画に反対している発話者に同化する。にもかかわらず、この発語の前半でも後半でも、同様に発語行為は遂行されている。後半では、断定という顕示的発語内行為が遂行されているが、前半で行われているのは、譲歩という派生的発語内行為であり、話し手はその発話者からは距離を置くことで、他人の視点を考慮する開かれた精神を持つ人物として自分を作り上げる。

第4の例である前提については、たとえば「ピエールは煙草をやめた」という発語は、「ピエールは昔、煙草を吸っていた」という前提を提示する行為と、「ピエールは今、煙草は吸わない」という事実の言明の行為の、2つの行為の遂行と捉えられ、それぞれの行為の責任者としてE1とE2の発話者が提示されている。このとき、発話者E2は発話者に同化されることで断定の行為の遂行が可能となる一方、「ピエールはかつて煙草を吸っていた」とする発話者E1は集合的な声である「人」(on)に同化され、発話者のレベルでは前提の行為は存在しなくなる。しかしそれでもこの集合的な声がピエールの過去の過ちを告発するように聞こえる限りで、この発話表現は派生的な形で前提の行為の遂行に使われる。



### 3 デュクロ以降の理論的展開

#### 3.1 フランス語用論とポリフォニー

ポリフォニー論は、デュクロの中心的テーマではないため、彼はこの議論をこれ以上発展させようとはしなかったが、ポリフォニー論を含めた彼の言語研究は、他のフランスの言語学者にも影響を与え、そうした影響の中でさまざまな理論が提案されてきている。そこで、それらの理論のいくつかとポリフォニー論の関係について簡単に見てみよう。近年のフランス言語学で特に興味深い理論を提出しているのは、スペルベル、レカナティ、フォコニエである。スペルベルはウィルソンとともに「関連性理論」を提起して、記号論的な言語理解とは異なる認知科学的な言語理論を提示した。レカナティは、独自の言語行為論を発展させ、語用論的意味論を深化させた。そしてフォコニエは「メンタル・スペース理論」という認知科学的言語理論を提示した。ポリフォニー論との関連で言えば、関連性理論は直接ポリフォニー論と関係はしないが、レカナティの議論とフォコニエの議論は興味深い示唆を与えるので、ここではレカナティとフォコニエの議論について簡単に見てみよう。

レカナティの基本的な問題は言葉の意味をめぐるものであり、言葉の意味は発語行為の中において初めて決定されると主張し、言葉の意味は発語のコンテクストとは別に言葉自体の字義通りの意味によって決定されるという主張を否定する。そして発話の理解において話者の意図の理解を重視し、話者の意図の理解には推論がなされると指摘し、スペルベルらの関連性理論に近い立場を取る（レカナティ 2006）。すなわち、発話の意図の理解は、その発話のコンテクストである発話のなされた時、場所、場（world）に依存しており、この依存性は特に指標辞（indexical）であるダイクシスや指示語において特に顕著に現れる。レカナティはその議論を展開するにあたって、発話者の意図とは無関係に見えるダイクシスである、一人称代名詞の指示対象についても、その指示対象が発話のコンテクストによって左右されることを（たとえば、直接話法の引用文の中での「私」はかならずしもその語る主体そのものを指しているわけではない）、デュクロのポリフォニー論を参照しながら指摘している（Recanati 2004: 9-10）。

フォコニエのメンタル・スペース理論（フォコニエ 1987）は、ある発語がなされるときには認知的に「メンタル・スペース」が形成されるというもので、一つの発語において複数のメンタル・スペースが形成されることもあり、複数のメンタル・スペース間の関係は、それらの間をつなぐコネクター（指示語）によって示されることになる。かくして、一つの発語の中に複数の異なる発語者や発話者が、メンタル・スペースごとに提示されることになる。こうした議論をするにあたって、フォコニエはデュクロには言及していないが、デュクロの議論と同様にバンヴェニストの問題意識を発展させたものであることは明らかであり、「主体性」という問題に関しては、デュクロとフォコニエは、同じではないが類似した図式を提出しているということができる。すなわち、デュクロが区別したさまざまな主体のあり方は、それぞれ異なるメンタル・スペースの中に置かれた主体、あるいはさまざまにメンタル・スペース間をつなぐ種々のコネクターに対応するものと見なすことができる。それゆえ、一つの発語の中にみられる種々の主体性は、その発語が示す種々のメンタル・スペース

に対応するものとなると言えよう。

### 3.2 ScaPoLine

デュクロのポリフォニー論はフランス以外の言語学研究者からはほとんど知られていない（日本でも、フランス語学研究者以外にはほとんど知られていない）。その例外がスカンジナビア（デンマーク、スウェーデン、ノルウェー）である。スカンジナビアでは1990年代から言語学者や文学者がデュクロ理論に関心を示し、研究グループを結成してデュクロ理論を発展させ、「言語学的ポリフォニーのスカンジナビア理論」（ScaPoLine: *théorie SCAndinave de la POlyphonie LINGuistiquE*）と呼ぶものを展開している。ScaPoLineグループは、デュクロの理論枠組みに比較的忠実でありながら、実際のテキスト分析を行うためにその理論を精緻化させ、分析手法として洗練させるという点で重要な貢献をしている（Nølke et al. 2004）。

ScaPoLineグループは、ポリフォニーは言語のレベルの現象であると考え、分析の対象を発語行為自体ではなく発語の内容にあるとする。この際、デュクロの発話者（*énonciateur*）という語に替えて彼らは視点 *pdv* (*point de vue*) という語を用いる。たとえば「この壁は白くない」という発言には「この壁は白い」という視点 *pdv*<sub>1</sub>と「*pdv*<sub>1</sub>は支持できない」という視点 *pdv*<sub>2</sub>の、2つの視点が現れ、この発言をしている発話者は後者の視点と一致する一方、*pdv*<sub>1</sub>の主体は明示されないため、聞き手（読者）は会話の規則に従って解釈することになる（Nølke et al. 2004: 26–29）。こうして意味の構築者である発話者（LOC）（一人称代名詞やモダリティなどによって示される）は、*pdv*となる場合とそうではない場合が区別される。視点 *pdv*は「Xの観点からpを判断する」という意味構造を持ち、あらゆるフレーズに少なくとも1つは見られるため、ポリフォニー構造の骨組みとなっている。このときの「判断」はモダリティなどで示されるか、そうでなければ事実として提示される（視点の源泉 X と判断は多くの場合明示されない）。そしてこの1つの発語の中での複数の視点の提示のされ方によって、単純 *pdv*と複合 *pdv*が区別される。さらに、発語によって提示される主体 *ê-d* (*être discursive*) を、発話者 LOC、対話相手 ALLOC、および第三者 *tiers* に分け、それぞれをさらにその提示のされ方によって分類する。たとえば、発語行為の場にいる LOC は *l*<sub>0</sub>、その発語と関わる存在として提示される LOC は *l*<sub>1</sub>、そして一人の人間として提示される LOC（テキストの発話者）は *L*として分類される。また、複合 *pdv*を単純 *pdv*に解釈し直す *ê-d*として「解釈者」も考慮される。

ScaPoLineの分析は、これらの種々の *ê-d* の間の関係がどのように発語の中で築かれ、それによって発語の意味が生み出されているかを明らかにしていこうというものである。ここではデュクロの議論よりもはるかに分析手法が形式化されて使いやすいものとなっており、またそれによりフォコニエらの議論との共通性も容易に見てとれるようになっている。しかし、もともとデュクロの理論がそうであったように、この理論も文学テキストを主として分析対象として想定しているものであり、話し言葉に基礎を置く実際の会話や社会過程に分析を拡張するには、さらにいくつかのステップを踏む必要がある。

## 4 社会科学におけるポリフォニー論とデュクロ理論

### 4.1 ゴフマン理論とポリフォニー性

デュクロのポリフォニー論は、言語学研究と文学研究を基礎としており、その対象は主として書き言葉である（デュクロ自身は、書き言葉に対象を限定してはいないが、実際に用いる事例の大半は文学テキストであり、会話の事例の場合も実際の会話のコーパスからとられたものではなく、想定された会話にすぎない）。しかし、実際の会話や言語行為を対象としたポリフォニー的研究も、デュクロとは別になされてきている。そうした研究の代表がゴフマンの議論である。

ゴフマンはその『言葉の形態』(*Forms of Talk*)において、疑似コード・スイッチング (code-switching like) という現象を取り上げ、そこでは「枠組み」が変更されることを指摘する。ゴフマンによれば、この「枠組み」の変更は「聞き手」(hearer) や「話し手」(speaker) の内実 (ゴフマンはこれを footing と呼ぶ) の変更を伴う<sup>2</sup>。このとき彼は、発話の場面における 3 種類の話し手の区別の必要を指摘する。それは物理的に声を発する発声者 (animator)、その発話の内容に対応する感情を抱いた人とされる作者 (author)、およびその発話自体によってその言葉を発したとされる当事者 (principal) の 3 者であり、通常、「話し手」という言葉が使われるとき、この 3 者が重なっているが (Goffman 1983: 143-144)、常に重なっているというわけではない。ここでは大まかには、ゴフマンの作者はデュクロの発話者 L に、同じく当事者は発話者 に、それぞれ対応させることができる。たしかにかならずしもデュクロの議論とゴフマンの議論は完全に重なるわけではないが、同じ方向性を向いているのである。

ここで興味深いのは、フォコニエが彼の「メンタル・スペース」概念とゴフマンの「枠組み」概念の関係を指摘しているからである。フォコニエによれば、ゴフマンのいう枠組みは対応するスペースを作ることによって区別することができ、したがって「メンタル・スペースが枠組みの設定および複数の枠組みの区別のための、言語的・認知的手段となりうることを示している」(フォコニエ 1987: 101)。すでにメンタル・スペース理論とデュクロ理論の関係について先に記したが、ここでもポリフォニー論とメンタル・スペース理論の近さを確認することができ、そこからポリフォニー理論の認知的な発展の可能性を再確認することができる。そしてレカナティの議論も考慮すると、ポリフォニー現象を顕在化させるのは、枠組みやコンテキストが変更されるときであることがわかる。

### 4.2 民族誌にみるポリフォニー現象

現実の社会的行為においてもポリフォニー現象はさまざまに現れるが、そうした例の一つが「引用」である。クリステヴァの言うように間テキスト性が言語表現の本質であるのであれば、すべての発話行為は種々の引用から成り立つ多声的なものである。それゆえ、どの発話からの引用がどのようになされるのかを詳細に分析することによって、多声性の構造を明らかにすることができる。

<sup>2</sup> レカナティの指標性をめぐる近年の議論 (Recanati 2004, 2006) が、類似した問題意識をもってコンテキストの変化について論じていることは興味深い。

また松木は、アカデミックライティングにおける引用関係が、論文に一定の権威を与えるとともに、アカデミックコミュニティ内の連帯性を強化する（と同時に、特定の論者をそのコミュニティから排除する）と指摘している（松木 2007）<sup>3</sup>。

このような多声的状況がより一般的に明示的に行われるのが宗教儀礼の場面である。たとえば、メトカーフはサラワクのブラワンの人々における祈りの分析において、一人の祈祷師の発した言葉が、死者や神の声となる例を分析している（Metcalf 1994）。こうした宗教儀礼における典型的な多声性は、シャーマニズムのように、ある一定の「発声者」がいてそこにさまざまな発話者がいけば憑依するというような形となる。通常の憑依型シャーマニズムの場合、「平常」に戻れば発声者は本来の「自分」を取り戻し、発話者の人格は発声者の人格に一致することになる（あるいは、発声者と発話者 L が一致するように、悪魔払い儀礼のようなものを行う）<sup>4</sup>。

しかし、同じ宗教儀礼でも、発声者自身の言葉にすでに複数の発話者が見られる例もある。三浦敦は、フランス農村でのカトリックの葬送のミサでの発話をポリフォニーの視点から分析し、司祭の言葉に現れるポリフォニー性が、死者を個別の存在から抽象化され神に近づけられた存在に変化させて行く役割を果たしていることを明らかにしている。ここでは、一つの司祭の言葉の中に、カトリック教会の言葉、死者を個人的に知っている個人としての司祭の言葉、「司祭」という職務を遂行している者としての言葉などが、同時に提示されているのである（三浦 1998）。こうした多声性も、引用関係を通して把握することができる。このときの「引用」には、単に一定の具体的な発話そのまま再現される場合もあるが、一定の定型的表現形式（さらに声色やイントネーション）が引用されることもある。

また、アフリカの諸社会のように一人の人間自体が複数の「人格」や霊的存在の合成として現れているような場合もある。たとえば西アフリカのドゴンの人々の間では、一人の人間の身体は、4つの元素から作られ22の構成部分か

<sup>3</sup> 松木はこの論文において、論文中における一人称複数代名詞（we, us, our）の指標機能に着目し、発話主体が一人称複数形で示されるというアカデミックライティングの標準規則が、アカデミックコミュニティ内の連帯性を強化し、特定の論者をそのコミュニティから排除する機能を果たしているとともに、その指示対象が文脈によって異なっていることを指摘する。それゆえ、論文における「we」も多声的に理解する必要があることになる（それぞれの we ごとにメンタル・スペースが形成されるとも言える）。しかし、このような一人称複数代名詞の機能は、むしろインド=ヨーロッパ諸語に特徴的なものと思われる。というのも、インド=ヨーロッパ諸語においては、三人称で指示される人物は対話から排除されるからである。その点、「人称」という概念が曖昧で、二人称（ときには一人称も）が固有名や指示語で示されるような言語（タガログ語や日本語）では、こうした現象が常に起こるというわけではない。なお、こうしたアカデミックライティングにおける self の問題は、ScaPoLine グループの一員のフレトゥムも ScaPoLine の視点から取り上げている（Fløttum 2005）。

<sup>4</sup> すでに指摘したように、デュクロがポリフォニー理論を構想した背景には発語行為論にある。文化人類学の儀礼研究では、一時期、この発語行為論を呪術研究に応用することが試みられていた（たとえば、呪いをかけるための儀式を発語内行為として分析する）（cf. Ahern 1981）。ポリフォニー論を使うと儀礼への新たな発語行為論的アプローチが可能となるだろう。

ら成っているが、それに対応する形で言葉もさまざまな構成部分から成っている。人間の体内には「ニヤマ」<sup>5</sup>と呼ばれる生のエネルギーが流れているが、このニヤマは両親や祖先から受け継がれてきたさまざまなニヤマから成っている。このニヤマの体内での流れを支配するのが霊性キキヌで、各個人には計8つのキキヌが棲んでいる（人性男性・人性女性・獣性男性・獣性女性の4つの身体のキキヌ、および人性男性・人性女性・獣性男性・獣性女性の4つの性のキキヌ）。そしてこの8つのキキヌに対応して言葉にも男性／女性、人性／獣性の区別が与えられ、それらが組み合わされることで言葉が作られる。これらの言葉には、発声者によってニヤマを与えられ、強いニヤマを持つ言葉は人に注意を持って聞かれることになる（Dieterlan 1987: 32-57）。これらの霊性（霊格ないしは人格）は、発せられた言葉や行為の責任が帰せられるという意味において、発語者 L として現れるが、この発語者はそれぞれの霊性という発話者の視点を提示もしている（ここでは、デュクロの「発話者 E」という用語よりも、ScaPoLine の「視点 pdv」という用語のほうが適切である）。さらに、一つの人格が発する言葉に現れる個々の霊性についてみても、それぞれの霊性の発する言葉自体にさらにポリフォニー性を見いだすことができると思われる（ただし残念ながら、ドゴンの民族誌を書いたディエテルランの研究では、会話コーパスの語用論的分析はされていないので、ここではこの点は確認はできない）。

より興味深い指摘は川田順造によってなされている。川田は西アフリカの諸民族におけるさまざまな言語使用について論じ、たとえばこの一夫多妻社会においては、妻たちはよく自分の僚妻にむけてあてこすり歌を歌うことを指摘する（川田 1988: 107）。このとき歌を作り歌っているのはこの妻であっても、「歌」という形式が現実とは別の架空の世界を作り、その形式ゆえにその歌の言葉に現れる「私」は歌を歌う人とは別の存在として提示される。そのため、歌の示す「あてこすり」は、声を出す話す主体とは別の発話者のものとされることになる。さらに川田は、西アフリカには固有名詞というカテゴリーがないこと（川田 1988: 104）、そこではもはや一人称・二人称・三人称という区別がほとんど意味を持たないことを指摘する（川田 1988: 176, 216）。儀礼や儀式では、話しかける相手は二人称のみならず三人称でも表現され、さらにそこには精霊や祖先が一人称で参加し、人称は常に変化するのである。バンヴェニストは「言葉が可能となるのは、それぞれの話し手が自分を『主体』として示し、発話の中で自分自身を『私』と名指すからである」（Benveniste 1966: 260）と指摘しているが、この指摘はかならずしも当たらないということである。

こうして一つの発話は無数の声のざわめきとなって現れるのみならず、実際のさまざまな対話は多様で未分化なポリフォニーとして現れることになる。ここから、そもそもこれらの発話において無数に現れる各「人格」を区別することが、どれほど実際の言語行為において意味をなしていることなのか、という問題が生まれてくる。かつて詩人のランボーは「私は一個の他人である」（Je est un autre）と言ったが、実際には、すくなくとも言語表現上は、「私」は無数の

<sup>5</sup> 「ニヤマ」はもともと、バンバラ語からの借用語である。バンバラ語はニジェール川流域のリンガフランカであり、この人格概念の基礎をなす「ニヤマ」概念も、西スーダン地域のさまざまな民族の間に広く共有されている。

他者の集まり、あるいはさらに、未だ諸主体として分化していない存在であるといえよう。

そうすると、社会科学的には大きな問題が一つ現れる。現在のさまざまな法制度は、一人の人間に一つの主体が対応することが前提となって形成されているが、本来的に発語がポリフォニー的であるならば、その制度の基本が成り立たなくなるからである（同様に、現在の社会科学理論は、こうした前提の上に築かれている）。ポリフォニーという現実を認めることは、新たな社会科学理論の構築が要請されるということの意味している。

#### 4.3 社会調査とポリフォニー

社会調査、特にインタビュー調査においても、言葉を通じたインタラクションが基礎にある以上、ポリフォニー性は考慮される必要がある。ただし、これは単に、調査者とインフォーマントの共同作業によってデータが作られるという、ポストモダン人類学の指摘した特徴にとどまるものではない。確かに多くの場合、インタビューデータのコーパスが提示されるとき、その言語形式よりも意味内容のみに注意が置かれ、結果として個々の会話参加者の主体の単一性は暗黙のうちに肯定される（これがポストモダン人類学の限界でもある）。しかしまた、インタビューというものの本質的な対話性そのものを、インタビューデータの解釈のために考慮しようという研究もあり、たとえば桜井厚(2002)はエスノメソドロロジーの成果を考慮したインタビュー調査論を展開し、さらに社会構築主義の議論も踏まえて、調査者と被調査者それぞれの主体性も、インタビュー調査という会話過程を通じて形成されることを指摘する。こうしたインタビュー過程の会話分析は、インタビューというものの素朴実証主義的見方を覆し、その豊かな可能性を開いている。

とはいえ、そこでは「調査者」と「インフォーマント」というものが、(それぞれの役割がどれだけ怪しいものであるかが指摘されてはいても)それぞれ個別のものとして存在していることが前提となっている点で、本論の視点からは十分とは言えない。実際にはインタビューという一つのコーパスの中の「調査者」や「インフォーマント」でも、それぞれが発する言葉自体がすでにポリフォニー的に構成されている。一人の調査者といっても、その主体性は首尾一貫したものではなく、さまざまな立場や見方が同時に交錯しているのであり、「インフォーマント」もまた同様である（それは、単にそれぞれの主体はさまざまなアイデンティティの要素に分解可能であるということだけではなく、社会のさまざまな声が個々の発言の中に現れるということである）。そしてそれらの複数の主体性が絡み合う中で言葉が発せられ、言語データが構築されていくため、インタビューという言語行為自体がこうしたポリフォニー性を前提として成立しているのである。そのため、どのような代名詞や指示詞が用いられ、そこでどの主体間の対話が一つの主張を生み出しているのかを明らかにすること、さらにはそこでどのようなメンタル・スペースが作られるのかは、データを解釈する上で不可欠の作業となるだろう。

しかもここではもう一つ注意すべき事柄がある。それは、社会調査においてはそのデータは最終的には書かれた資料として提示されることになるため、「書く」というファクターが新たな問題を提起するということである。インタビュー調査を行い、その言葉を書き起こしてデータとする場合、実際の会話そ

のものと、その会話が文字として書き取られたものとは、本質的に言語形式が異なること、したがって書き起こしたとたんにデータにはバイアスがかかってしまうことが忘れられてしまうことが多い。たとえば先の桜井も、インタビューという社会的行為に関わる人間関係のさまざまな問題には触れながらも、インタビューの内容とその書き起こした内容の相違については何も言及がなく、何の留保もなく両者は同一視されている。しかし「書く」という行為は、一定の書式（ページへの割当や、使われる文字形式、余白の取り方や改行の仕方など）に従う必要があるが、これらはすべて話し言葉にはないものであり、したがってそこに別の主体性（発話者または視点）を潜り込ませることになる。さらに、話し言葉と違って書き言葉は発話のコンテキストから切り離されて提示されるため、データとしての復元性を考える調査者はそこに、自分の解釈に基づくコンテキスト性を特に付与することもある。しかしながら、すでに指摘しているように、デュクロもまた、この書き言葉と話し言葉の相違は十分に認識しているわけではない。この点は今後の課題であろう。

## 5 ポリフォニー現象と言語社会

### 5.1 ポリフォニー現象と日本語

すでに指摘したように、デュクロのポリフォニー理論は基本的に文字言語（書かれたテキスト）を前提として成り立っている。しかし、話し言葉にもデュクロ的分析の適用は可能である。そのような分析の例が、三浦（1998）である。これは、フランスの葬送のミサにおける司祭の発話（と葬儀参加者の応答）を、分析したものである（ただし、このコーパスは高度に形式化されているという点で、通常の話し言葉とは大きく異なる）。

とはいえ、こうした分析がどんな言語においても可能であるかどうかは、かならずしも自明ではない。デュクロがポリフォニー論を構想したとき、その「主体」として想定されるのは、発話を実際に行うだけではなく、発話行為の責任を担う存在であり、また一人称代名詞で指示される（しばしば主語として提示される）対象である。デュクロがデータとして用いたコーパスはフランス語によるものであるが、フランス語は「人称」概念が明確であるという特徴を持ち、そのためデュクロのポリフォニーの分析もダイクシスである一人称および二人称の代名詞が重要となる。しかし、世界のすべての言語において人称指示の体系がフランス語（あるいは現代のヨーロッパ諸言語）と同じであるわけではない。たとえば日本語やタイ語、あるいはオーストロネシア諸語といったアジアのいくつかの言語においては、人称代名詞が数多くあり、また人称代名詞以外の語がしばしば人称指示に使われる。

たとえば日本語では、一人称単数を示す代名詞は複数あり状況に応じて使い分けられる。たしかに、ヨーロッパ言語にも類似したシステムとして、T/V システムが存在する。しかし T/V システムの場合、適用されるのは二人称に限られ、その二人称代名詞も親称と敬称の2つにしか分類されない上、三人称代名詞や複数代名詞が二人称の敬称に転用される。そのためここでは、相手を直接名指して攻撃性を示すような行為（Face Threatening Act: FTA）を避けることが丁寧な表現であるとする、ブラウン&レヴィンソンのポライトネス論（Brown & Levinson 1987）がそのまま適用できる。これに対し、日本語における多様な

人称代名詞のシステムはポライトネス論だけには還元できないものを持っていると言えよう。実際、一人称代名詞は、話し手を指示すると同時に、その会話の状況や発話者と対話相手の関係をも表象しており、デュクロの用語で言えば、発語に際して発話者 L は必然的に、発語内容についての視点を提示する発話者とは別に、発話者と対話相手の関係についての視点を提示する別の発話者も提示しているのである。さらに、現在の日本語の用法では二人称指示にあたっては代名詞よりも相手の固有名が一般的に用いられるため、ある発語が会話の相手に向けられているのか（固有名が二人称として用いられる場合）、そうではないのか（固有名が三人称として用いられる場合）は、会話の状況によらなければ決定できない。

日本語の主語（主格補語）概念についてはさまざまに議論されているが、そうした議論を考慮すると日本語の発語行為におけるポリフォニー性の問題は、おそらくフランス語の発語行為の場合とは異なっていることが予想される（ただし、ここで問題となるのは文法的カテゴリーとしての主語の問題ではなく、発語行為の主体がどのように指示されるのかという問題である）。たとえば、日本語ではしばしば発話者 L は明示されないかわり、かならずしもその特性が同定されえないような発話者（視点）E が交錯するよう見える。それゆえ、日本語においてはまず、人称分化する以前の多様な視点＝発話者が提示され、そのなかから一定の発話者の主体性が浮かび上がっていく、という構造を持っていると言えるかもしれない。このことはもちろん、社会科学的にも興味深い現象である。

## 5.2 ポリフォニー現象とオーストロネシア諸語

他のアジア言語ではどうだろうか。そのすべてを取り上げるのは不可能だが、ここでは、共にオーストロネシア諸語に属するマレー諸語（マレーシア語とインドネシア語）とフィリピン諸語（タガログ語とセブアノ語）を取り上げて、簡単に展望してみよう。

オーストロネシア諸語の特徴は、フォーカス言語であるという点である（付論参照）。オーストロネシア祖語は、台湾ないしは中国南部が起源地と考えられており、フォーカス性を持つ能格言語という特徴を持っていたとされるが、タガログ語などのフィリピン諸語は比較的よく祖語の特徴を持っているのに対し、15世紀からの交易の時代に東南アジア島嶼部地域のリングフランカとなって発展してきたマレー諸語（マレーシア語、インドネシア語など）の場合、その文法的特徴は大幅に簡素化されている。

まず、フィリピン諸語の一つであるタガログ語から取り上げてみよう。タガログ語では、人称代名詞にはそれほど大きな種類はなく、たとえば、一人称代名詞は *ako* か、その変形である *ko* のみが使われる。こうした人称代名詞の特徴は他のフィリピン諸語でも同様である。そのため、日本語の人称代名詞のような問題は生じないといえよう。

むしろ問題となるのは、そのフォーカス（焦点）機能である。タガログ語の場合、ある語が焦点となるかどうかはマーカーという冠詞のような語で指示される。すなわち *ang* というマーカーはその後に来る語に焦点が置かれていることを示し、*ng* というマーカーはそのあとに来る語には焦点が置かれていないことを示している。ただし人称代名詞は、マーカーなしに焦点の有無が示され



る（例：ka=「あなた」焦点形，mo=「あなた」非焦点形）。ポリフォニーという点から興味深いのは，たとえば次のような文である。

Binasa ko ang aklat.  
 <is read by me (marker) the book>  
 The book is read by me (/It is the book I read).

この場合，焦点，すなわち視点の中心には aklat（本）が置かれており，ko（私）は中心には置かれていない（この場合「ko」は動作主であるが，動詞によっては「ko」は動作対象になるのであり，非焦点形の ko と焦点形の ako は格には対応していないことに注意）。それゆえ，ここには「私」とは別の視点が見込まれ，「私」もそうした視点に晒されていることになる。

タガログ語などのフィリピン諸語で興味深いのは，三人称においてもしばしばダイクシスが用いられる点である（MacFarland 2006）。この場合のダイクシスは，日本語の指示詞（コソアド言葉）と同じで，話し手からの空間的距離によって示される（そのため，バンヴェニストのいう「無人称」にはならない）。長屋尚典によれば，三人称にダイクシスが使われるのはその三人称に焦点が置かれていない場合に限られ，また，三人称が人間ではない場合は名詞で示されることが多く，さらに，焦点が置かれていない場合，三人称指示が省略される（ゼロ・アナフォラ）となる場合も多いことが示されている（Nagaya 2006: 89）。すなわち，三人称が人称代名詞で示されるということは，話者がその三人称の視点で話していることを示しているのである（吉村 1987: 39）。

次にセブアノ語（フィリピン中部の言語）について，その焦点のあり方を見てみよう。マッジンのコーパス分析によれば，行為者に焦点が置かれる（actor-focus）場合と行為対象に焦点が置かれる（goal-focus）場合はほぼ半数ずつである（McGinn 1995）。そしてペインによれば，他動詞が用いられる場合は行為対象に焦点が置かれるのが基本的形態であり，自動詞では行為者に焦点が置かれるのが基本的形態である（Payne 1994）（ここには能格言語の特徴が現れている）。であるならば，複数の異なる視点が交錯することが，セブアノ語においてはごく普通であるということが言えよう。こうした視点から，フィリピン社会における相互交渉による意思決定の言語過程や行為遂行性を分析すれば，フィリピン社会の人間関係の質や「人格」のあり方を議論することができよう。

次にマレー語についてみてみよう。マレー語もフォーカス言語であるが，タガログ語のようなマーカーは用いられず，その代わりに動詞に人称の接頭辞が付くことで動作主や動作対象が示される。マレー語では人称代名詞は，日本語ほどではないとはいえ数が多い。たとえば，一人称単数の人称代名詞には，主要なものとして aku と saya がある。しかし，aku は一般的には目上のものが目下のものに使うものとされ，通常は saya が使われる。ここで興味深いのは，オーストロネシア祖語に由来する本来の一人称代名詞は aku（タガログ語の ako に対応）であるのに対し，saya はもともと奴隷を意味する言葉で，インドから輸入されたものであるという点である。17 世紀に書かれたマレー文学の代表作である『マレー年代記』（*Sejarah Melayu*）では，まだこの一人称代名詞の語源的意味についての知識がその著者にはあった（崎山 1982: 797）。このよ

うに、マレー語では一般名詞が人称代名詞化する例が見られ、親族名称が人称代名詞化することもある（最近では、マレー語の二人称代名詞に英語の二人称代名詞もよく使われるという）。この点で、マレー語の状況はやや日本語に似ていると言えよう。

さらに、日本語と同様に、マレー語においても主語の曖昧さが指摘されている。マレーシア語における「主語」について考察した鶴沢洋志は、マレーシア語においては、ある語が主語（ここで「主語」とは、「何かについて」表すときの、その「何か」を意味内容として持つもの）であることを示す絶対的な語順も、言語形式も存在せず、文の意味解釈からのみ文の他要素から区別できると指摘する（鶴沢 2004: 151）。マレー語において主語というものがインド=ヨーロッパ語と同じようには同定できず、また人物指示も異なってくるとしたら、当然、発語に現れる主体性もデュクロが主として検討したフランス語の場合と大きく異なってくるだろう。ここでは、主語や人称、指示詞といったもの、さらにはフォーカスや態といったものの再考を通じてポリフォニーを捉え直すことが必要となってくる。程度こそ違え、フィリピン諸語、さらには日本語やタイ語についても同様のことが言える。こうした、フランス語とは異なる形での人称指示や主体性の提示を見てみれば、これらの言語においては、フランス語（ヨーロッパ諸語）における発語行為とは異なる発語行為の形態が予想される。そしてさらに、こうした発語行為の相違が社会関係の微妙な相違、さらには諸社会制度（たとえば、『マラッカ法典』における法の構造など）における実際の運用の相違と関連していることも予想される。この点こそ、今後、検討していかなければならないことであろう。

## 6 おわりに

以上、隣接分野の研究を視野に入れながらデュクロのポリフォニー論を見てきた。この概観はきわめて不十分なものでしかないが、それでも、デュクロの理論により、日常の発語行為の中での意味構築のメカニズムを実際に形式的に分析することが容易になったということは明らかだろう。とはいえ、デュクロのポリフォニー理論はかならずしも十分に発展させられ完成された理論とは言えず、まだ「素描」にとどまっているものである。その理論はまだ書き言葉を主とした対象としているし、デュクロやその継承者たちの研究は主としてフランス語（および英語やスカンジナビア諸語の、インド=ヨーロッパ語）の分析にとどまっている。

こうした限界を乗り越えていこうとすると、ポリフォニー理論自身もさまざまな修正が必要となるかもしれない。たとえば、ポリフォニー理論が前提としている人称構造は、むしろ発語におけるポリフォニーの効果として議論すべきであるように思われる。特に話し言葉においては、人称関係（したがって発語に現れる諸主体の個性）は未分化なものとして提示されることもあり、まさに人称の生成といった現象に立ち会うことになる。また、人称指示の問題だけでなく、主体性の問題、そして行為の問題という、本来は異なる諸問題を丁寧に選り分けて議論する必要もある。こうした問題はとくに、オーストロネシア諸語においてより顕著になるように予想される。

主体関係の相違が言語行為の実際に影響を与えたとしたら、言語的相互行為

を通じたさまざまな交渉のあり方（そしてその結果）は、まさに言語という社会的行為の道具の形態によってある一定の影響を受けることが明らかにできよう。ポリフォニー理論はこうした問題に対処できる段階にはまだないが、しかしそのための道具立ての一つを提示している。

### 付論：タガログ語とマレーシア語の文法的特徴

#### オーストロネシア語族

フィリピン諸語とマレー諸語は、オーストロネシア語族に属する言語である。オーストロネシア語族は、台湾、東南アジア島嶼部、オセアニア、およびマダガスカルと、広い範囲で話されている一連の言葉の総称である。その故地は台湾または中国南部と考えられている。

オーストロネシア諸語の言語学的な特徴としては、動詞にさまざまな接辞（接頭辞、接中辞、接尾辞）がつくことでさまざまな派生語を生み出していく点や、時制がなく代わりにアスペクトが重要である点、フォーカス（焦点）に基づく表現がなされる点、および能格性を持つ点が大きな特徴としてあげられる。接辞による派生語の形成は、一種の活用とも言うことができるが、品詞の枠を越えてなされるので、むしろ「品詞」という概念は曖昧となる。もともとの祖語においては VSO ないしは VOS であったと考えられる。台湾の高山諸語は、祖語にもっとも近い形を残していると考えられている。

#### タガログ語

フィリピン諸語は、フィリピン列島で話されている言葉で、そのうちタガログ語はルソン島中部の方言で公用語となっている、フィリピンでもっとも話者人口の多い言葉であり、セブアノ語はフィリピン中部のビサヤ地方で話されている、話者人口が2番目に多い言葉である。両者は文法構造は類似しているものの、語彙や発音は大きく異なっている。

フィリピン諸語では語順は、オーストロネシア祖語と同じく、VSO または VOS が基本である。焦点（フォーカス）の置かれる語（つまり視点の中心となる語）には「ang」（人の場合は si）というマーカーが前に付き、そうではない語には「ng」（ナーンと発音、人の場合は na）というマーカーが付く。そしてその焦点の置かれた語が動作主になるのか、動作対象になるのか、あるいはその他のもの（動作場所など）なのかといった点は、動詞に付加される接辞によって決まる。例を見てみよう。

Bumasa ng aklat ang tao.  
 <Read (marker) book (marker) person>  
 The person reads a book.

Binasa ng tao ang aklat.  
 <Read (marker) person (marker) book >  
 The book was read by a person.

上記2つの例で、「bumasa」「binasa」はともに、動詞「basa」（=read）にそれぞれ接中辞「-um-」「-in-」が付いたもので、前者は ang 以下の語が動作主で

あること、後者は **ang** 以下の語が動作対象であることを示している。以上の例はもちろん、インド=ヨーロッパ語における能動態と受動態に対応するとも言えるが、タガログ語（オーストロネシア諸語）の場合、強調が置かれるのは動作主と動作対象に限らず、場所などさまざまあり、それに応じてさまざまな接辞が用いられる点に特徴があり、態 **voice** のあり方はより複雑となるほか（タガログ語には 4 つの態があるという議論もある）、能格性の問題もあるため、上記の例を態の問題として捉えるのは適切とはいえない<sup>6</sup>。人称代名詞にもこのシステムが適用され、視点の中心となる場合（強調形と一般形がある）とそうではない場合（通常形）が区別される（ただし、人称代名詞にはマーカーは付かない）。すなわち、一人称単数では、強調形は **ako**、一般形は **ko**、通常形は **ko**、二人称単数では強調形は **ikaw**、一般形は **ka**、通常形は **mo** となる。これに対し、主格か、目的格か、あるいは所有格かという区別はない。

### マレーシア語

マレー語（ムラユ語）は、現在のマレーシアからインドネシアにかけて広く話されている言葉である。現在のマレーシアの公用語であるマレーシア語と、インドネシアの公用語であるインドネシア語は、マレー語の方言が発展したものであり、両者はほとんど同じ言葉である。

マレー語はもともと、マレー半島西岸のマラッカ王国で話されていた言葉である。15 世紀にこのマラッカ王国が東南アジアの商業ネットワークの中心となることにより、ムラユ語は東南アジア島嶼部のリングフランカとなり、また『マラッカ法典』といった法律文書や『マレー年代記』に代表されるマレー古典文学がマレー語によって記述された。また、リングフランカとなるのに伴い多くの文法要素が簡素化され、マーカーや時制（アスペクト）といったものは消滅し（時制は、文脈や時間を示す副詞によって示される）、語順も **SVO** となることが多い（ただし、英語などと違って、最初に主語がこなければならない、というわけではない）。

このように現代マレー諸語は文法的に簡略化されたが、しかし焦点が文の基礎にあることには変わりはない。例を見てみよう。

Dia	membelikan	anaknya	separu	baru.
<He	bought	son+his	shoes	new>
He bought his son new shoes.				

Anaknya	dibelikannya	separu	baru.
<son+his	was+bought+by him	shoes	new >
His son was bought new shoes by him.			

ここでは焦点は文頭にある語に置かれている。この際、動作対象にフォーカ

<sup>6</sup> フィリピン諸語の焦点の問題を、「態」の問題と考えることができるか否かについてはさまざまに議論されている。Brainard (1994) は、これは態と見なすことはできないと指摘しているが、近藤健二 (1999) は、こうした焦点性と密接に関係している能格性は、オーストロネシア語族においては主格から変化してきたものであることを指摘している。なお、こうした文法的特質が、実際の会話場面（発語行為）において行為をどのように規定するのかは、また改めて議論しなくてはならない問題である。

スが置かれるとき（第 2 例）、動作主が三人称であれば、動詞には接頭辞 di- と動作主を示す接語代名詞 -nya が付加される（動作主が一人称が二人称の場合、接語代名詞 ku- または kau- が接頭辞のない動詞に付加される）。ここで、動詞 membelikan と dibelikan は、ともに語根 beli から派生した語である。

【文献】

- Ahern, Emily, 1981, *Chinese Ritual and Politics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Bakhtin, Michael, 1986, *Speech Genres and Other Late Essays*, ed. and trans. by C. Emerson, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- バフチン, ミハイル, 1995, 『ドストエフスキーの詩学』望月哲男・鈴木淳一訳, 筑摩書房 (ちくま学芸文庫).
- Benveniste, Emile, 1966, *Problèmes de linguistique générale (1)*, Paris: Minuit.
- Brainard, Sherri, 1994, "Voice and Ergativity in Karao," in T. Givón (ed.), *Voice and Inversion*, Philadelphia: John Benjamins, pp. 365–402.
- Brown, Penelope & Stephen Levinson, 1987, *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Clifford, James, 1988, *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art*, Cambridge: Harvard University Press.
- Crapanzano, Vincent, 1980, *Tuhami: Portrait of a Moroccan*, Chicago: University of Chicago Press.
- デリダ, ジャック, 2002, 『有限責任会社』高橋哲哉ほか訳, 法政大学出版局 (叢書ウニベルシタス).
- Dieterlan, Germaine, [1965] 1987, *Ethnologie et langage: la parole chez les Dogon*, 2e éd., Paris: Institut d'Ethnologie.
- Ducrot, Oswald, 1984, *Le dire et le dit*, Paris: Minuit.
- フォコニエ, ジル, 1987, 『メンタル・スペース理論——自然言語理解の認知インターフェイス』坂原茂ほか訳, 白水社.
- Fløttum, Kjersti, 2005, "The Self and the Others: Polyphonic Visibility in Research Articles," *International Journal of Applied Linguistics*, 15(1): 29–44.
- Genette, Gérard, 1972, *Figures III*, Paris: Seuil.
- Goffman, Erving, 1983, *Forms of Talk*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 川田順造, 1986, 『聲』筑摩書房.
- 近藤健二, 1999, 「能格的なものの発展をめぐって (7)」『言語文化論集』21(1): 53–67.
- MacFarland, Curtis, 2006, *Deictic Pronouns in Philippine Language*, Tenth International Conference on Austronesian Language.
- 松木啓子, 1999, 「ナラティブアプローチの可能性と限界をめぐって——『異文化』理解の詩学と政治学」『言語文化』同志社大学言語文化学会, 4(1): 759–780.
- , 2007, 「アカデミックライティングの社会記号論——知識構築のディスコースと言語イデオロギー」『言語文化』同志社大学言語文化学会, 9(4): 635–670.
- McGinn, Richard, 1995, "Discourse, Markedness, and the Ecomotion of Focus (AGR) in Rejang," *Proceedings of Austronesian Formal Linguistic Association (AFLA) II*.
- Metcalf, Peter, 1994, "«Voilà ce que je dis»: la projection de la parole dans la prière berawan," *L'Homme*, 132: 59–76.
- 三浦敦, 1998, 「パパ・マクシムの葬儀——葬送のミサにおける人格概念の語用論的分析 (フランス・ジュラ)」『民族学研究』62(4): 441–469.
- Moerman, Michael, 1988, *Talking Culture: Ethnography and Conversation Analysis*,

- Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Nagaya, Naonori, 2006, "Preferred Referential Expressions in Tagalog," *Tokyo University Linguistic Papers*, 25: 83–106.
- Nølke, Henning et al., 2004, *ScaPoLine: la théorie scandinave de la polyphonie linguistique*, Paris: Kimé.
- Payne, Thomas E., 1994, "The Pragmatics of Voice in a Philippine Language: Actor-Focus and Goal-Focus in Cebuano Narrative," in T. Givón (ed.), *Voice and Inversion*, Philadelphia: John Benjamins, pp. 317–364.
- Recanati, François, 2004, *Indexicality and Context-Shift*, Paper submitted at Workshop on Indexicality, Speech Acts and Logophors, Harvard University.
- , 2006, "D'un contexte à l'autre," in J.-F. Marillier et al. (Hrsg.), *Text und Sinn: Studien zur Textsyntax und Deixis im Deutschen und Französischen Festschrift für Marcel Vuillaume zum 60*, Tübingen: Stauffenburg Verlag.
- レカナティ, フランソワ, 2006, 『ことばの意味とは何か——字義主義からコンテクスト主義へ』今井邦彦訳, 新曜社.
- 崎山理, 1982, 『『マライ編年史』の代名詞——KWIC にもとづく比較研究』『国立民族学博物館研究報告』7(4): 788–824.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- Simonin-Grumbach, Jenny, 1975, "Pour une typologie des discours," in J. Kristeva et al. (dirs.), *Langue, discours, société: pour Emile Benveniste*, Paris: Seuil.
- スベルベル, D. & D. ウィルソン, 1993, 『関連性理論——伝達と認知』内田聖二ほか訳, 研究社.
- 鶴沢洋志, 2004, 「マレーシア語の主語に関する一考察」『言語・地域文化研究』東京外国語大学大学院, 10: 141–155.
- 吉村近男, 1987, 「タガログ語指示詞とその指示構造」『大阪外語大学学報』75(1-2): 25–47.

## Linguistic Analysis of Polyphony of Discourse and Social Sciences: On Ducrot's Polyphonic Linguistics

Atsushi MIURA

Since Bakhtin's study, polyphony in discourse is a crucial theme in literary and linguistic studies as well as in recent post-modern anthropology. In this domain, a French linguist Ducrot presented an important theoretical work in 1984, essentially based on the study of French discourse. In this paper, by examining his theory of linguistic polyphony, we try to reveal implication of polyphony to social science. After discussing significance of Ducro's theory in linguistic theories, we examine ethnographic evidences and research methodologies in terms of polyphony. We also explore the possibility of polyphonic analysis of non-European language practice; here some Austronesian languages (Filipino and Malay) are discussed.

**Key words:** polyphony, Ducrot, subjectivity, Austronesian languages